（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　竹ノ内雅人

本論文は、日本近世における神社・神職の歴史的特質を、神社社会という視点から、都市社会史や身分論との関わりの中で考察するものである。神社・神職の研究はこれまで主に宗教史的なアプローチが大半であったが、これを広く近世史研究の中に定置しようと試みる野心的なものである。

まず「序論」において、研究史の整理を踏まえつつ問題の所在を明らかにし、本書の課題・方法を示す。本論部分は、江戸を対象とするⅠ・Ⅱ部と、駿府と下伊那を素材とするⅢ部から構成され、終章で全体のまとめを試みている。

第Ⅰ部「神社・神職の身分編成と都市社会」では、近世後期江戸における神職・神主の身分と集団の具体相を 4 つの章で検討する。1 章で、神職の諸階層の状況や神社組織の複雑な構造を、都市社会との関係の中に解明する。2 章では、天保改革期における吉田家配下神主組合の訴願運動を取り上げ、神主の格式をめぐる論理（公儀の直支配）やその背景を明らかにする。3 章では、江戸市中に展開した宗教施設（道場）の実態を、そこに集う植木屋など小商人との関係にも注目しながら解明する。4 章は、天保改革の中で下層宗教者（修験・神職）が強制移住させられる様相を明らかにし、併せてかれらの生業の実態に迫る。

続く第Ⅱ部「神社と町の関係」では、江戸の古跡地神社（寺社奉行所轄のものとして公定された格式）と周辺社会との関係構造について検討する。5 章は佃島住吉神社を素材に、神社経営の実態とその特質を、佃島の社会構造や、問屋仲間など島外の社会集団との関係に注目しながら考察する。6 章は、新材木町の椙森稲荷社を事例に、氏子や祭礼に関わる諸集団の実態を明らかにし、さらに 7 章で、四谷天王・稲荷両社と近隣社会との関係を、地域における祭礼の運営構造から検討する。

また第Ⅲ部「地方都市における神社の編成と周辺社会」では、駿府と飯田藩域を取り上げて、神社と地域社会との関係を探る。8 章は、駿府浅間神社を素材とし、社家の実態を組織や編成のされ方などから解明する。9 章は、飯田藩における寺社編成と藩による支配に関する基礎研究であり、続く 10 章では、飯田藩領域内にある鳩ヶ嶺八幡宮を対象として、その主体である神宮寺の性格、周辺諸村の社家編成、飯田藩支配との関わりなどについて考察する。そして終章で本論文全体の総括を行い、神社社会論への展望に触れる。

本論文の主要な成果は、これまでほとんど検討されてこなかった神社社会の総合的な解明をめざし、具体的事例分析を豊富に提供しつつ、神職集団の身分構造、神職の経営、周辺の都市社会との関係構造の特質を解明したところにある。本論文は、一部にまだ荒削りな点もあり、全体の構成もⅠ・Ⅱ部とⅢ部との関係がやや不鮮明なことも気になる。しかし、それぞれの論題に関する史料群を精力的に博捜し、個々の史料分析は緻密かつ的確であり、さらに重要な論点を数多く摘出して新知見を豊富に提供するなど、全体として質的に高い水準にあり、かつ近世史研究全体に大きく貢献する内容を持つものと評価できる。本審査委員会は、上記のような優れた成果に鑑みて、本論文が博士（文学）に十分値するものであるとの結論を得た。